

編集者のことば

この号は、大都市の人間科学（・社会科学）的研究の特集号とも呼べる内容の論文7編から成る。前段をなす3編の論文は、北海道から九州までの地方中・小都市、ならびに離島の小・中学生から大人までの住民、すなわち、さまざまな地理的環境・世代の人々をもつ大都市のイメージを分析したものである。論文内容は多岐にわたるが、きわめて大胆に言えば、調査法と大都市の基本的イメージ、世代差、大都市居住希望・イメージの構造分析への流れになると編集者は読む。また、総じて、高校生を中心とする若い人・大都市の遠方住民ほど、正のイメージをもつ傾向がうかがえる。本誌第9, 10, 12, 15, 16号などの「多摩地区総合調査」における関連論文を再読して頂ければ筆者らの研究意図がよく理解できよう。そして、大都市居住者へと、この研究が回帰するのは必然とも思われ、今後の進展を期待したい。

これらに続く2つの論文は、居住環境と行動・健康などに関する調査・分析である。前者は、大都市、中間域、非都市域の住民の生活意識、健康・体力意識、運動・スポーツ意識の調査から大都市居住者の健康・体力・スポーツ生活改善に資することを目的としている。後者は、特に高層住宅に居住する1才から6才までの子供達を対象に調査を行い、子供の発達を規定する要因は、高層居住という物理的要因よりも、母親等の重要な他者や遊びの構造などの方が強いとの興味深い結論を導いている。

終わりの2編の論文は、確かに震災に関連するが、極めて人間科学的・社会科学的アプローチであり、小坂のそれは、大都市住民サイドからみた行政の防災対策の評価、都市の安全性の評価、我が家の地震防災対策を含むコミュニティ防災意識に迫ったものである。最後の論文は、1985年メキシコ地震の被害を把握し、復興問題を考える際の諸々の背景の記述である。メキシコは、ペソの下落、石油価格の下落で、数年前のレポートさえ参考書として十分使えないほど、社会・経済的変動が激しい。地震被害の大部分は、世界最大の巨大都市メキシコ市に集中した。この頁の主都への諸々の集中度は、日本における東京の比ではない。したがって、メキシコの問題はメキシコ市の問題、そのものといわれている。この地震で特筆すべきは、ボランティア・罹災者の引き取り保護などメキシコ人の素晴らしい愛他行為である。それらを含め、日本人にはなかなか理解し難いメキシコ人とその社会実態、課題と展望を現地でのヒアリングを中心にまとめた。

この第27号は、本センターの専任研究員、非常勤研究員の組織が確立した昭和60年度の最終号である。すでに発刊した第25, 26号を含め、本誌の内容は、都市問題の総合的学際研究の成果として着実に充実しつつあると信ずる。また、若干発行期日は遅れてはいるが、その点も相当に改善が進んでいる。本センターの研究特色をさらに鮮明に反映すべく本誌のなお一層の充実を図る所存である。

(望月利男)